

松下幸之助に学ぶ!!

『希望と』

幸せづくりのために』

第三回

文・全国PHP友の会

会友 梶浦 洋一

(徳島PHP友の会顧問)

(H/PPHAG&

『葉根譚の会』世話人)

衆議院で強行採決されて参議院へ送られた安全保障関連法案は審議の最中に思わぬ与党議員の《暴言》や《不規則発言》が重なり、ぎくしゃくした会議運営になった。安倍

首相出席での予算委員会がようやく始まり、本格的な論戦となりそうである。かつて、徳島県選出の三木武夫元首相は、岸信介内閣当時に閣僚を務めていたが、岸首相が憲法

改正・再軍備を提起しようとした時に、それを諫めた。また、中曽根内閣の官房長官を務めた、本県選出の後藤田正晴官房長官は、中曽根首相が海外派兵を議論もうとした

折に、これを断念させて、平和を維持したと言われている。

先日、本県出身93歳の瀬戸内寂聴さんと90歳の村山富市元首相は、このたびの安保関連法案「戦争参画可能法案」は、命がけで阻止すると宣言した。

徳島弁護士会でも『安保関連法案』は憲法違反の立場から、同法案の撤回または廃

案を求めて8・30パレードや9・12徳島県民大会を徳島市の【藍場浜公園】で挙行する。

「私たちの声よ届け！」

子どもや孫の世代、そして私たち自身の平和な未来をつくるために、いまこそ、私たちの声を安倍総理に届けよう！」と。

現在、本県選出の現内閣閣僚の一人、山口俊一氏や政務官の後藤田正純氏らは果たして、どう動くのか、多くの人の注目を集めているようである。

長所を見る

松翁曰く、

「人は十人いれば十人みな違うのやからね。それなりに特色があるわけだね。その特色を見出して、これを活かしてやるという配慮です。そういう配慮が多少ともあればいいですね。」

ぼくが今日あるのは、そういうところに多少長じておったんかなと思うね。はたから見たら、あの男はあまり優秀じゃないといわれる人であっても、

ぼくには、なかなかいいところがあるじゃないか、偉い男やなと思うことが、何度もありましたもの。あの男困るんや、文句ばかり言って・・・といわれる人でも、縁あってうちにいったら、結構がんばる。むこうで欠点だといっていたのが、うちでは長所です。

短所は苦にしない、長所だけ、特色だけを見て使う。そうむずかしいことじゃありませんよ。しかも、それだけのことで、人が育つか育たんかということが決まるんです。」

(『30億』昭和51年4月号)

①『人間はダイヤモンドの原石』

「私は、お互いの人間はあたかもダイヤモンドの原石のごときものだと考えている。つまり、ダイヤモンドの原石は磨くことによって光を放つ。しかもそれは、磨き方いかん、カットのし方いかんで、さまざまに異なる燦然とした輝きを放つのである。それと同じように、人間はだれもが、磨けばそれ

それに光る、さまざまな素晴らしい素質をもっている。だから、人を育て、活かすにあたっても、まずそういう人間の本质というものをよく認識して、それぞれの人がもっているすぐれた素質が活きるような配慮をしていく、それがやはり、基本ではないか。もしそういう認識がなければ、いくらよき人材がそこにあっても、その人を人材として活かすことはむずかしいと思う。」

〔人を活かす経営〕

②「人を使える人」

「人間というものは、だれでも長所と短所とをもっている。長所ばかりでまったく短所がないという人もいないかわりに、短所ばかりでなんのとりえもないという人もいないと思う。だから、大勢の人を擁して仕事をしているのであれば、それぞれに多種多様な長所と短所が見られるわけである。」

その場合、短所を中心にみると頭が痛くなってくる。「この男はこういう点がダメだ。あの男はあ

あいつた点がいまひとつだ」という具合で、だれも彼もがもの足りないということになる。だから、いきおい使うことも躊躇されてくる。「彼をあそこの責任者にしようと思うのだが、どうも不安だ」というわけで、なかなか思い切つて人が使えない。

また、部下のほうも、短所ばかり見られたり指摘されたのでは、面白くもないし、なんとなく萎縮してしまつて、十分成長できなくなつてしまつてしまうだろう。

その点、長所を見ると、「あれはなかなか立派な男だ」ということになり、その長所に従つて活かしかつて方考えられてくる。だから、ある程度大胆に人が使えるようになってくる。部下のほうも、自分の長所が認めてもらえればうれしい。そのうえで「きみ、こういうことをやってくれ」と言われれば、「よろしゅうございます」と言つて知らず識らず一所懸命に働く。自然、仕事の成果もあがるし、人も育つと

いうわけである。

だから、人を使う立場にある人は、自分がすぐれている、偉い、というだけではいけない。自分が偉いというだけでは、事が知れている。私が長年の経験の中で見てみると、その人自身は同じようにすぐれていても、部下の長所を見る人、短所を見る人、両方ある。そして、やはり長所を見る人は伸びているが、短所が目につくという人はどうもうまくいかないようである。

だから人を使う立場にある人は、努めて長所を見ていくようにしなくてはならない。いいかえれば、長所を見ていくというところができる人は、多くの人が使える人だとも考えられる。

もちろん、長所ばかり見て、短所をまったく見ないということではいけないかもしれない。けれども、どちらかといえば、短所を見ずして起こる弊害よりも、長所を見ることによって生ずるプラスのほうが大きいと考えて

いいのではないかと思う。だから適当に短所を見つ、主として長所を見る、いわば四分六というか、長所に目のつくほうが六分、短所を見るほうが四分という方がいいのではないか。そういう人は、だいたいにおいて人を使える人である。その反対の人は、人を使うことがむずかしい人だといえよう。

私自身はといえば、体が弱くて部下の人に仕事をしてもらわなければならなかったから、どちらかと言うと長所のほうに七分目をやつて、短所のほうは三分しか見ないというような傾向だったように思う。だから、それだけ大胆に人が使えた。まあ、そんなところにも多少とも成功の原因があったとも考えられる。

〔人事万華鏡〕

夢や目標を与える

「私は経営者というものは絶えず希望というものを与えなければいかんと思うな。つまり、人をうまく使うか使わないかとい

うことのポイントは、絶えず夢を与えたいまますか、希望を与える。そして、生きがい、働きがいというものを生み出していく、というようなことを与えていくことが、上手な人の使い方に結びついていくんじゃないかと思うんです。

だから日本の国であれば、日本国民にたえず希望を与える。《日本は今後こういうふうなやつていくんやな、そういうふうなやつてきて世界に貢献するのやな、それは非常に意義があるな》というようなことを日本国民全体に思わせるような政治というものがあれば、これは上手な政治である。国民をして上手に動かす政治である。こういうふうなことになるんでしような。

そういう希望を与えない、夢を与えないということは、やはり人を活かすことにならんのかな、という感じがしますね。」

（富士製鉄社長 永野重雄氏との対談「昭和43年12月20日」）
（つづく）